

日本人類遺伝学会第 63 回大会

P-096

神奈川, 2018. 10. 11-13

当院における流産絨毛染色体検査結果の検討

Study of villous chromosomal analysis of abortion of patients in our hospital

阿江大樹<sup>1</sup>, 庵前美智子<sup>2</sup>, 浅井淑子<sup>1</sup>, 井上朋子<sup>1</sup>, 中岡義晴<sup>2</sup>, 森本義晴<sup>1</sup>

<sup>1</sup>医療法人三慧会 HORAC グランフロント大阪クリニック

<sup>2</sup>医療法人三慧会 IVF なんばクリニック

【背景】当院は体外受精の反復不成功や習慣(反復)流産などの既往がある症例が多く集まる高度生殖医療施設である。初期流産の多くは胎児染色体異常が原因であり、患者の高齢化や難治性不妊症の増加に伴い流産率も上昇する傾向が認められている。当院ではタイミング療法、人工授精、体外受精の不妊治療後の初期流産の症例に対し、インフォームドコンセントのもと絨毛染色体検査を施行している。

【方法・対象】開院以降 2015 年 1 月～2018 年 6 月に当院で G 分染法による絨毛染色体検査を施行した 80 症例について後方視的検討を行ったので報告する。

【結果】流産時の母体平均年齢は 39.7±3.5 歳(29 歳～45 歳)であった。培養成功例は 75 例(93.7%)であり、56 例(70%)に染色体異常が認められた。そのうち常染色体トリソミーは 45 例、性染色体異常は 3 例、倍数体は 4 例(3 倍体 2 例、4 倍体 2 例)、構造異常は 4 例であった。年齢別の染色体異常率は 35 歳以下: 62.5%(5/8)、35 歳～39 歳: 50%(12/24)、40 歳以上: 72.9%(35/48)であった。また 9 例においては 2 箇所以上に Trisomy を認め、全て 40 歳以上の症例であった。

【考察】当院における流産児の絨毛染色体の 7 割は染色体異常であった。流産原因となる染色体異常は加齢による卵子の染色体異常の増加が関係していることが示唆される。また加齢に伴い複数個所での染色体異常が起きることも考えられる結果であった。しかしながら、一般の報告と比較し当院における染色体異常率は年齢依存度が低く、当院のような難治性不妊症患者の集まる施設において流産原因は加齢に伴う染色体異常以外にも存在すると考えられる結果であった。いずれにおいても絨毛染色体検査による流産原因の解明は、今後の治療方針を検討するうえで有用な情報である。流産患者において遺伝カウンセリングを実施することは、患者への情報の提供や整理、今後の治療に対する自立的な意思決定の支援の場として重要な役割を果たすと考えられる。